

ふるさと御所  
文化財探訪

其の四十三

古墳時代 (31)  
巨勢(許勢)氏の  
台頭(3)

巨勢合の横穴式石室②

文化財課  
☎60-1608



写真1 水泥北古墳の横穴式石室  
(羨道から奥壁を撮影)

今回は水泥北古墳、水泥南古墳について触れたいと思います。  
水泥北古墳は水泥塚穴古墳とも呼ばれており、6世紀後半〜末頃に築造された直径約20mの円墳です。石室は南に開口する両袖式の



写真2 水泥南古墳の家形石棺に施された蓮華文

横穴式石室です。棺は現在では失われていますが、石室内からは石棺の材料となる凝灰岩の破片が出土しており、元々は石棺が置かれていたと考えられています。

この古墳の床面下には、土管約20本が連なって設置されていました。これらは排水管として追葬時に敷設されたもので、土管の作り方は瓦作りの技術と非常によく似ています。

水泥南古墳は水泥蓮華文石棺古墳とも呼ばれ、7世紀初頭に築造された直径約25mの円墳です。石室は南に開口する両袖式の横穴式石室で、2基の刳拔式家形石棺が置かれています。2基のうち、石室の奥に置かれている初葬の石棺は二上山凝灰岩で作られており、手前に置かれた追葬の石棺は前回挙げた竜山石で作られています。

水泥南古墳で特に注目すべきは、追葬された石棺の蓋の縄掛突起と呼ばれる出っ張り部分に施された蓮華文(ハスの花の文様)です。蓮華文は仏教で用いられる文様の一つで、寺院の瓦などによく使用されています。なお、この石棺の両側面の縄掛突起は、追葬時に石棺を石室に運び込む際に羨道側壁に当たるため削られています。本来はそこに線刻が施されていたことが分かっています。何が描かれていたのかは判然としませんが、仏教にかかわるものであったことは疑い得ないところです。

このような文様を石棺に施すという行為ひとつをとってみても、仏教という先進的な文化をいち早く取り入れようとする被葬者の姿勢、そしてそれを可能とする権力をよく映し出しているようです。

さて、両古墳の被葬者ですが、明治時代に、歴史学者の喜田貞吉によって、『日本書紀』「皇極紀元年二月」の条に、**今來の雙墓(2つの墓)**としての記載があることから、2つの古墳は蘇我蝦夷・入鹿の墓であると提唱されていたことがあります。しかし、近年の発掘調査の結果、両古墳は蘇我蝦夷・入鹿が亡くなった時期より少なくとも20年は古く築造されたことが判明しました。この説は成り立たなくなりました。よって、水泥北古墳、水泥南古墳は、ともに前号の権現堂古墳、新

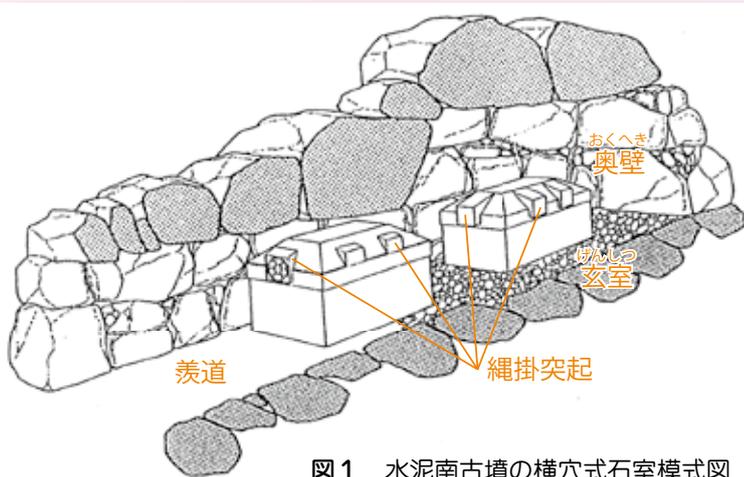


図1 水泥南古墳の横穴式石室模式図

宮山古墳に続く巨勢(許勢)氏の盟主墳といえるでしょう。

【参考文献】

河上邦彦『後・終末期古墳の研究』、

1995年、雄山閣

(文責 西村慈子)

